

富永神社祭礼奉納

と き 平成八年十月十一日(金)
ところ 富永神社 午後四時始
能楽殿

能 組

仕舞 小海 人督船
西城里香
林由加里
平野阿裕美

狂言 口真似
太郎冠者 赤堀誠一
主人 松井健悟
客 水野晃二
後見 畑中良雄

仕舞 七狸落々
中嶋 薰
清水 俊典

独調 羽衣
長田 颯
今泉利夫

狂言 太刀奪
太郎冠者 水野真広
主人 山本誠也
通行人 西田猛利
後見 畑中良雄

仕舞 松狸 虫々
今泉孝子
鳥居久仁子
本田洋子
岩崎 葉子

能 葛城
後シテ 清水利高
前シテ 中嶋康夫

(休 憩 三〇分)

ワキ 竹内 佐武朗
大鼓 河村 真之介
小鼓 永田 六兵衛
後見 鈴木 肇
地謡 竹田 森 今泉 英三
内中 田 泉 英三
声位 洋 收 三
太田 高林 高林
田 林 林
康 白 白
弘 口 口 二

小舞 雪治の山
宇治の晒
忍ぶ其夜
七つ子
佐野元之助
大原正巳
山口俊一
水谷 至男

連調 枕慈童
高林白牛口二
高林 白牛 口二
川村直芳
永田 益聡 子
水谷 京子
竹下 京子

6 : 30分頃

5 : 30分頃

4 : 40分頃

4時

7 : 40分頃

独調 船弁慶

高林白牛口二

水谷 清

狂言 三本柱

果報者 小林常男

太郎冠者 安形忠久

次郎冠者 加藤賢一

三郎冠者 天野雅夫

後見 佐藤友彦
山本憲吉

独調 清 經キリ

高林白牛口二

今岡 アイ子

仕舞 葵 上 鈴木 肇

狂言 梶山伏

山伏 酒井 宏

兄権 田重紘
弟西 田好夫
後見 中山伸一

8 : 20頃

半能 高 砂シテ 太田康弘

ワキ 竹内 声位 晤

大鼓 清水利高 大鼓 中嶋康夫
小鼓 森田 收 笛 今泉英三

後見 鈴木 肇

地謡 竹内 佐武朗 永田 六兵衛
田中 洋二 高林 白牛口二
鈴木 崇史 高林 呻

(終了予定九時頃)

主催 本町区

8 : 40分頃

あ ら す じ

狂言 口真似（くちまね）

知人から酒を貰った主人、一緒に楽しく飲んでくれる人を探して来る様にと太郎冠者に言い付けます。ところが連れて来たのは、評判の酒癖の悪い男。一計を案じた主人は太郎冠者に、自分の言うよう、するように真似をせよと言いつけまします。

太郎冠者は、主人のいうこと全てをまねて客にくり返すので怒った主人は……

狂言 太刀奪（たちうばい）

主人と太郎冠者が北野神社へ参詣に出かけます。そこで太郎冠者に「槍なりとも、太刀なりとも持つて供をせよ」と言います。槍も、太刀もないのでよい太刀を持った男を見つけて、その太刀を奪うことにします。太郎冠者は考えて主人に刀を借りて太刀を奪おうとしますが、かえって主人から預かった刀を取られてしまします。

二人は太刀をとり戻すために男を待ち伏せして捕えるが、太郎冠者は男を縛る繩を悠々と縋いはじめます。そして……

能 葛 城（かづらき）

出羽国（山形県）の羽黒山から出た山伏が、大和国（奈良県）の葛城山へとやって来ます。折りしも降りしきる雪に悩んでいると、一人の里女が現れ、庵に案内し焚火をたいもてなします。そして雪の中で集めて束にした木々の細枝を標（しもと）と呼ぶのだといい「標結ふ葛城山に降る雪の、間なく時なく思ほゆるかな」という古歌もあると教えてくれます。山伏は好意を謝し、やがて夜の勤行を始めようとすると、女はお勤めのついでに加持祈禱をして、自分の三熱の苦しみを助けて下さいと頼みます。山伏は不審に思つて、その素性を尋ねると、自分は葛城の神であるが、昔役の行者に命ぜられた岩橋を架けなかつたため、不動明王の索に縛られ苦しんでいるといつて消え失せまします。（中入）

そこえ麓の男が上つて来たので、葛城山の岩橋の事について尋ねます。その話を聞き、先程の女の事など思いあわせ、奇特なことと思ひ、夜もすがら女神のために祈禱します。するとその修法にひかれて葛城の神が現れ、三熱の苦を免れた喜びを述べ、大和舞をまい、暁近くなると、岩戸の内え姿をかくします。

狂言 二本柱（さんぼんのはしら）

主人が太郎・次郎・三郎の三人に、家を新築するための柱を山へ取りにいかせる。

山に着いた三人は、二本の柱を三人の者が二本つつ持つようにと主人が出した謎を解くことが出来た。このうえは賑やかにと柱を担ぎ、囃子物を謡いながら帰ってくる。

それを聞いて主人は……

狂言 梟山伏（ふくろうやまぶし）

兄が弟の太郎の具合が、山から帰って来てから急に悪くなったので、山伏に祈祷して治してくれるよう頼みます。

山伏が一心に祈り始めると、太郎は急に「ポーン」と奇声を発し出す。

梟がとり憑いたのだと察した山伏は、なおも一心不乱に祈り続けるが、その結果は……

能

高砂（たかさご）

九州肥後国（熊本県）阿蘇宮の神主友成は、都に上る道すがら、播州（兵庫県）高砂の浦に見物に立寄ります。たそがれ近い浜辺には吹くともない微風が松の枝にそよぎ、尾上寺の人相の鐘が響いてきます。そんな静かな景色のなかに、夫婦と覚しい抜群に年たけた老夫婦が墨絵のように現われます。友成は老人たちをみて、高砂の松の由来を問います。老翁は古今集の序にある高砂住江の松を「相生」とよぶいわれを語り、また高砂を遠い奈良朝に、住吉をいまの延喜の聖代にたとえ、松の緑の尽きないように御代の栄えも変わらぬという古代の言葉を伝えます。友成はめでたい由来をさいて大いによろこびなお詳しい松の物語りをせがみます。

老翁は更に語をついで、松が四季を通じてその緑は変わらず、花は一千年に一度ひらくという「生」の象徴として古来から異国でも本朝でも賞讃されているなど、さまざまな例をあげ、二人は相生の松の精が仮に老夫婦の姿になって現われたのだと明かして沖の彼方にきえてしまいます。

友成は日の出とともに高砂の浦を出帆して住江の岸に到着します。すでに夜も更け、中天高く月が澄みわたると、さらめく波間から住吉明神が出現して、国土安穩寿福千年を祝う神遊びの舞を舞います。波頭は青海波の舞樂、颯々と鳴る松風は聖代を謳歌するかとも聞えてめでたい限りです。